

第四回 太史慈たいしじ小霸王しょうはおうと酣さかんに戦いくう

— 孫策そんさく、起おこつ —

○前回から今回まで

董卓の死後、董卓の殘党りかくの李傕りかくと郭汜かくしが長安に攻め込み、王允おういんは殺され、呂布は長安を脱出して東に逃れます。

この間、曹操そうそうは、若き荀彧じゆんごくを軍師として迎え、着々と勢力を拈えんげて、ついに兗州えんしゅうを領有することに成功します。

そんなおり、曹操の父曹嵩そうそうが徐州じょしゅうの長官陶謙とうけんの配下のために殺され、曹操は激怒して徐州に猛攻をかけます。窮地きゆうちに陥おちつた陶謙は北海太守の孔融こうゆうに救援を要請、孔融は劉備に助けを求めてともに徐州に向かいます。陶謙は救援に來た劉備に惚ほれ込み、徐州を劉備に譲りたいと申し出ますが、劉備は固く辞退します。

一方、曹操は、徐州攻撃で手薄になつた兗州えんしゅうに呂布が乗り込んで來たため、ただちに徐州から撤退します。徐州の危機は一旦去りますが、陶謙は病の床で劉備に徐州を託して亡くなります。こうして、劉備は正式に徐州の主となります（三讓徐州さんじょうじょしゅう（三たび徐州しゅうを讓ゆずる））。

曹操は、苦戦しながらも呂布を撃破して兗州を奪還します。いっぽう劉備は、曹操に敗れて逃げ込んで来た呂布を受け入れますが、呂布の裏切りにあつて、せつかく手に入れた徐州を呂布に奪われてしまいます。

さて、いったん舞台は変わり、後の呉の基盤をつくる孫策が登場します。

孫策の父孫堅は、曹操、劉備とおなじく黄巾軍との戦いで活躍し、ついで董卓との戦いで最初に都洛陽に突入して名を挙げます。しかしその後、孫堅は不慮の死を遂げてしまいました。孫堅が死んだとき、長男の孫策はまだ十代の少年でした。孫策は、はじめ袁術の傘下に入りますが、まもなく袁術から自立して、江東平定に乗り出します。

今回はここからです。

(本文抄)

袁術は寿春において、部将や兵士のために盛大な宴会を開いた。この日、宴会が終わると、孫策は陣営にもどった。しかし、宴席での袁術のはなはだ傲慢な態度に、気持ちが悪くさして、皓皓と月が冴えわたる中庭を歩きまわっていると、父の孫堅はあれほどの英雄だったのに、自分はここまで落ちぶれたかと思うと、われ知らず声をあげて泣いてしまった。

とその時、一人の人物が入ってくるなり、大声で笑って言った。

「伯符はくふ（孫策の字）あざな」どの、お父上は生前、何かにつけて私を頼りにしてくださいましたものだ。決めかねることがおありなら、私に相談してくださいればよいではないか」

孫策が誰かと見ると、それは丹陽郡故鄣こしょう県出身の朱治しゅち、あざなは君理くんりという人物で、孫堅のかつての部下だった。孫策は涙をぬぐい、朱治を部屋に招き入れて言った

「私が泣いていたのは、父の志を継ぐことができないのを、情けなく思ったからだ」と。

「どうして袁公路えんこうろ（袁術）に申し入れて、兵を借りて江東に渡り大事を図ろうとなさらないのです。他人の下で小さくなっても仕方ありません」と朱治。

また突然、一人の人物が入って来て言うには、「ただいまの話、しっかりと聞きました。

私の配下には百人の精鋭がいますから、伯符どのにお貸しして、及ばずながらお力添えしましょう」

孫策が誰かと見ると、袁術の参謀で、汝南郡細陽じよなん さいよう県出身の呂範りよはん、あざなは子衡しこうであった。

呂範は言った。

「だが、袁公路えんこうろが兵を貸そうとしないことが気がかりです」

「私は、亡き父上が残した伝国でんこくの玉璽ぎよじを持っているから、あれを質しちに入れてやろう」と孫策。

「公路はずっと前から、あれを欲しがっております。それを質になされば、きつと兵を貸すでしょう」と呂範。三人は相談がまとまった。

翌日、孫策は袁術に面会を求め、涙ながらに言った。

「父の仇を討つこともできませんのに、今また母方の叔父の呉景が、揚州刺史の劉繇に攻められ、私の老母も危険な目にあおうとしております。私は数千の精銳をお借りし、長江を渡つて家族の危難を救いたいと存じます。亡父の残した伝国の玉璽がありますので、これをしばらく質に置かせていただきます」

袁術は玉璽があると聞くや、これを手に取つて眺めると、大いに喜んで言った。

「おまえから玉璽を取り上げるつもりはないが、しばらくここで預かつておこう。三千の兵と五百頭の馬を貸してやるから、劉繇を討伐したら、すみやかに立ちもどれ。」

孫策は朱治・呂範、および父の旧将である程普・黄蓋・韓当らを引き連れ、吉日を選んで進發した。

歴陽まで進んだとき、一手の軍勢がやって来るのが見えた。先頭に立つのは、颯爽とした容姿で、眉目秀麗の人物。孫策が誰かと見れば、廬江郡舒城県出身の周瑜、あざな公瑾であった。孫策を見るなり、馬から飛び下りて拝礼をした。

もともと孫堅は董卓討伐のさい、家族を舒城県に移住させた。周瑜は孫策と同年だったので、非常に親密な間柄あいだがらになり、義兄弟の契りを結んだ。孫策の方が周瑜より二か月年上だったので、周瑜は孫策を兄として仕えたのだった。

孫策は周瑜に、心中の思いを打ち明けた。周瑜は言った。

「私も旗あげに加わらせてください。大馬けんばの労ろうをいといません」

孫策は、「公瑾こうきん(周瑜の字)が加わってくれば、大事は成就じょうじゆしたようなものだ」と喜んだ。

(解説)

孫策が袁術に差し出した「伝国の玉璽」

董卓が去ったあとの都洛陽に一番乗りした孫堅は、五色ごしきの光が立ち上がる井戸から「伝国の玉璽」(皇帝が用いる印璽いんじ)。秦しん以来、代々の王朝で継承されたという天子てんしの証あかしを発見します。これがあれば皇帝になれると孫堅は玉璽を隠し持ちますが、荊州けいしゅうの劉表りゅうひょうとの戦いで山上から大石を落とされ命をおとします。孫策はその玉璽を受けつぎ、皇帝への野望をいだいた袁術に差し出して、江東かうとうに向かうことを許されます。そして、父孫堅以来の、朱治、

程普、韓当らの宿将しゆくしやうとともに江東の制覇せいぱをめざします。

おさななじみ

幼馴染の義兄弟、周瑜も孫策のもとに駆けつけます。そして孫策軍の陣容は一気に充実します。颯爽さつそうとした若き孫策と周瑜が先頭に立つと、腕に覚えのある若者たちが続々と参加してきます。

孫策と周瑜の友情

そんはりよとうぎやく

ちゆう

じよ

『三国志』孫破虜討逆伝とその注ちゆうには、孫堅が董卓討伐に向かうにあたり、家族を舒じよに移住させたこと、またその際、周瑜が大きな邸やしきを孫策の家族に提供し、孫策と周瑜は「十餘歳」の同い年で、金属を断つほどの強く交わりを結んだ（「義は斷金だんきんに同じ」と書いています。

（本文抄）

よつしゆしし

りゆう

せいれい

とうひ

ぼうへい

きよくあ

さて、揚州刺史の劉繇はあざなを正礼せいれいといい、東萊郡牟平とうらいぐんぼうへいの出身で、漢王朝の一族であり、もともと寿春じゆしゆんに駐屯していたが、袁術に追われて江東に渡り、曲阿きよくあにやって来たのである。

このとき、孫策が攻めて来たと聞いて、劉繇は部将たちを集めて協議した。

幕下ばくか（直属の部下）の一人が叫んだ。

「私わたしに先鋒せんぽうをつとめさせてください」

一同がこれを見ると、これぞ東萊郡黄県出身こうしんの太史慈たいしじであった。しかし劉繇に、「おまえはまだ若いから、大将にはなれない。私の側そばについておればよい」と言われて、太史慈はしぶしぶ引き下がった。

劉繇は神亭しんていの峠の南に陣営を造り、孫策は峠の北に陣営を築いた。

孫策は土地の者にたずねた。

「この近くに漢の光武帝こうぶていの靈廟れいびやうがないか」

土地の者が言うには、「廟なら峠の上にあります」

孫策は言った。

「わしは昨夜、光武帝が私をお召しになる夢を見た。これから行ってお参りしてくる」

そこで鎧よろいに身を固め、鎗やりをつかんで馬にまたがると、程普ていふ・黄蓋こうがい・韓当かんとう・蔣欽しょうきん・周泰しゅうたいら合計十三騎をお供に連れて、陣営を出て峠に登って参詣した。

孫策は祈願がおわると、廟を出て馬に乗り、ふりむいて部将たちに言った。

「峠を越えて、劉繇の陣営を探ってみよう」

部将たちはみな、思いとどまるよう言ったが、孫策は聞かない。

かくして孫策主従はともども峠を登り、南方の村や林のあたりを眺めやった。

と、いちちはやくこの知らせが、劉繇のもとにもたらされた。

劉繇は言った。

「これは孫策が仕掛けた誘いの手だ。追ってははならぬ」

太史慈は躍り上がって、「今、孫策を捕まえなければ、二度と機会はありません」と言う

や、劉繇の命令を待たず、鎧兜よろいに身を固めて馬に飛び乗り、鎗やりをつかんで陣営を出ると、

大声で叫んだ。

「度胸のある者は、ついて来い」

ただ一人の部将だけが、「太史慈はまことの勇将だ、私が加勢かせいします」と言い、馬を蹴立けたて

て太史慈にしたがった。

さて、孫策が峠を越えようとしたとき、頂上から「孫策、逃げるな」と叫ぶ声が出た。ふ

りかえって見ると、二頭の馬が飛ぶように駆け下りて来る。孫策は十三騎を横にならべ、自

分は鎗こわいを小脇こわいにかかえて待ちかまえた。

太史慈は声を張り上げて言った。

「どいつが孫策だ」

「そういうおまえは、何者だ」と孫策。

「われこそは東萊とうらいの太史慈たishiである。孫策を捕まえに来たのだ」

「私が孫策だ。おまえたちが二人そろってかかって来ても、逃げるようなわしではないぞ」と孫策は笑った。

太史慈が馬を飛ばし、まっすぐ孫策に攻めかかると、孫策もこれを迎え撃ち、両馬はが馳はせちがうこと五十合ごじうごうに及んだが、勝負がつかない。

太史慈は負けたふりをして、孫策をおびき出そうとした。太史慈が山麓さんろくをまわると、追いかけてきた孫策は大声で怒鳴った。

「逃げるとは卑怯べいけんだぞ」

太史慈は心のなかで、「こいつには十二人もいるが、こっちは一人だ。たとえ生け捕りにしても、ほかの者に奪い返されてしまうだろう。もう少しおびき寄せてから、討ち取ってやろう」と考えたので、時々戦いながら逃げつづけた。

孫策がそのまま追いかけると、平坦へいたんな土地にでた。太史慈は馬をめぐらして、ふたたび戦

いを挑み、また五十合戦った。

孫策が鎗を突き出すと、太史慈はさつと身をかわし、鎗を小脇に挟み込んだ。太史慈も同じく鎗を突き出したところ、孫策もまたと身をかわし、その鎗を小脇に挟み込んだ。二人は組み合ったまま馬から転がり落ち、馬はどこかへ逃げて行ってしまった。

二人は鎗を捨て、取っ組みあい殴りあつたので、戦袍せんぽうもちぎれて粉々こなごなになった。孫策がわずかに早く太史慈の背中の短戟たんげきを引き抜くと、太史慈も孫策の頭の兜かぶとをはぎ取った。孫策が戟で太史慈を刺そうとすると、太史慈は兜でこれを受け止める。

その時ふいに関せきの声が起こった。劉繇の手の援軍千人余りが到着したのだ。

孫策が慌てたところところにちようど、程普ら十二騎も駆けつけたので、孫策と太史慈はやつと手を放した。

太史慈は、援軍から馬を手に入れ鎗やりを取ると、また馬に乗ってやって来た。孫策も鎗を手にして馬に乗った。千人余りの劉繇軍と程普らの十二騎は入り乱れて、神亭かみぐさの山麓さんろくになだれ込んだ。

そこへ関の声があがったかと思うと、周瑜が軍勢を率いて駆けつけた。劉繇の大軍もまた、山麓に殺到した。おりしも日暮れに近づき、烈はげしい雨と風になったため、双方軍をまとめて

引きあげた。

(解説)

孫策と太史慈の一騎打ち

この本文抄は、『三国志』太史慈伝にある「太史慈が從騎一騎じゆうきをしたがえて斥候せつこうに出た。たまたま、韓当・宋謙・黄蓋らを従えた孫策に遭遇した。太史慈は敢然と孫策に挑んだ。孫策は太史慈の馬を刺し、太史慈がうなじに巻いていた手戟しゅげきを掴み取ると、太史慈もまた孫策の兜を取った。このとき両軍の騎兵が殺到すると、両者は引き下がった」との記述にもとづいています。

劉繇はその後の戦いで、結局、孫策に敗れてしまいます。劉繇が敗走した後も、太史慈は引きつづき孫策軍と戦いますが、最後は敗れて捕らえられ、孫策の前へ引き出されます。

(本文抄)

孫策は太史慈が引つ立てられてきたと聞くと、みずから彼の繩を解き、自分の錦織にしきおりの戦袍せんぼうを着せかけながら、陣營のなかに請しょうじ入れて、こう言うのであった。

「私は、子義（太史慈の字）どのがまことの大丈夫であることをよく知っている。劉繇があなたをよく用いることができずに、敗れてしまったのはなんと愚かなことだ」

太史慈は孫策の丁寧なもてなしに感じて、降伏を願い出た。

孫策は太史慈の手をとると、笑いながら言った。

「神亭での一騎打ちのとき、もし君が私を捕らえていたら、おそらく生かしておかなかっただろうな」

太史慈は笑いながら答えた。

「それはわかりません」

孫策は大笑いしながら、陣幕のなかに請じ入れると、酒宴を催して歓待した。

太史慈は言った。

「劉君（劉繇）は今回の敗戦で、部将や兵士の心を失っています。私が出かけて行って残党を集め、殿の軍勢に加えたいと思いますが、信用していただけるでしょうか」

孫策は言った。

「それこそ私の望むところだ。君と約束しよう。どうか明日の正午までに帰って来てもらいたい」

太史慈は承知して出発した。諸將たちは言った。

「太史慈は立ち去れば、二度と帰っては来ないでしょう」

孫策は、「子義は信義を知る男だ。けっして約束を違えることない」と言ったが、諸將は誰も信じなかった。

翌日、陣營の門に竿を立てて日影を測って待っていたところ、ちょうど正午になろうというとき、太史慈は千人余りの兵を引き連れて陣營に戻ってきたので、孫策は大いに喜び、一同は孫策の人を見る眼力の鋭さに敬服した。

こうして孫策は江東を平定し、住民を慰撫し慈しんだため、身を寄せる者は数えきれないほどだった。江東の人々は孫策のことを「孫郎（孫の若君）」と呼び、当初は、孫郎の兵が来たと聞くだけで、みな肝をつぶして逃げ出したが、孫策の兵が来てみると、誰ひとり略奪をはたらかなかつたため、鶏や犬さえ驚かず、住民はみな心から喜んで、牛肉や酒を届けて軍をねぎらった。孫策はこれに金や絹を与えて返礼したので、歓呼の音が津々浦々に満ちわたった。劉繇の元の兵士で、従軍を願う者はそのまま軍に残し、願わない者は褒美を与えて帰農させた。

江南の人々は、孫策を敬愛し誉めたたえないものはなく、これによって、その武威は大い

に盛んになった。

(解説)

若き孫策と周瑜は力をあわせて、わずか二、三年のうちに江東制覇を成し遂げます。

「意気をもって相投ず（趙翼「二十二史劄記」）と評された、孫策の颯爽とした姿が目につかぶようです。また、太史慈と孫策との一騎打ちと、太史慈が孫策の人柄にうたれて部下となるくだりは、「走れメロス」のメロスとセリヌンティウスのごとき、深い信頼の絆を描きます。

『三国志』太史慈伝では、戻る期限を一日ではなく六十日としていますが、こちらも約束の期限内に戻ってきています。注に引く「江表伝」では、孫策が太史慈の逃亡を危惧する声に、「その心中にはものごとに対する見通しがあり、行なおうとするところはつねに道義にはずれず、人となした約束はあくまでも尊重されて、ひとたび相手を知己だとして心を許したならば、死をかけてもそれを守り通される。諸君の（逃亡するとの）心配はご無用なことだ」と述べています。

『三国志演義』は、太史慈を後の「赤壁の戦い」でも活躍させていますが、実際は「赤壁

の戦い」の二年前に四十一歳で亡くなります。死に臨んでの言葉は、

「大丈夫たるもの、この世に生をうけたかぎりには、七尺の剣を帯びて、天子の階きざはしを升るべきものを、それが果たせぬうちに死ぬことになるのか（『三国志』太史慈伝）」というものです。

また、『三国志』は孫策の人となりを次のように記しています。

「秀ひいでた容姿をそなえて、談笑だんしょうを好み、性格は闊達かつたつで他人の意見をよく聴き入れ、適材適所じしんに人を用いた。そのため士人たちも民衆たちも、彼に会ったことのある者は、すべて誠心誠意せいしんせい、命をかけて彼のために働きたいと願った」

孫策は容姿に恵まれ、闊達かつたつな性格で部下を信頼し、この人のためなら死んでもいいと思わせる天性の魅力を備えていました。

また、周瑜については、成人するとともに立派な風采ふうさいをそなえ、寛大な性格で度量どりようがあり多くの人の心をつかんだ、若いときから音楽に精通し、たとえ酒盃しゅはいが三度回った後でも演奏の僅わずかな間違いを聞き分け演奏者の方を振りかえった、などの記述があります（『三国志』周瑜伝）。

今回は、孫策と周瑜、また太史慈の、胸のすくような友情と信義の名場面でした。